報告

博物館開館とともに気運が高まる地域づくり

本誌編集部

天草市御所浦地域は、八代海中央部に位置し、御所浦島（令和二年国調人口一五三九人）、牧島（二六七人）、横浦島（五一二人）の三島の有人島を含む一七の島から構成される。熊本県の事業により、昭和六一年には御所浦島と牧島が架橋され、その後、御所浦島と横浦島、横浦島と天草上島の架橋も構想されたものの、令和六年現在、事業は休止となっている。御所浦地域へは天草市・上天草市の三港（本渡港、棚底港、大道港）からの定期船に加え、対岸の水俣港から予約制の乗り合い海上タクシーで行くことができる。

令和六年三月二〇日、御所浦港正面に、「天草市立御所浦恐竜の島博物館」が開館した。本稿では博物館のオープンを機に、活性化の気運が高まる同地域の現況を報告する。

御所浦島

天草の化石の価値を伝える博物館

「御所浦島は、中生代白亜紀に当たる一億年から八五〇〇万年前の地層が海岸などに露出しており、化石が多く見られます。これは御所浦の弁天島で発見された恐竜の足跡の化石です」

御所浦恐竜の島博物館の廣瀬浩司学芸員の案内によると、同博物館の特徴は、御所浦島をはじめ天草地域で発掘された化石を潤沢に展示している点だという。館内の展示物は約二千点だがこのうち半数が天草産の化石となっている。加えて、現在生息する生物に関する展示などもあり、天草の自然史について知ることができる。「ポケット学芸員」というアプリを使えば、手持ちのスマホからより詳細な解説を読むことも可能だ。

庭からアンモナイトが見つかることもあるくらい、元々化石が豊富な島であるが、平成九年に植物食恐竜と国内最大級の肉食恐竜の化石が相次いで見つかったことで、恐竜で島おこしをしようとの気運が高まり、博物館の前身となる「御所浦白亜紀資料館」が開館した。その後も化石の発見は続き、施設も老朽化してきたことから、今回、大幅拡張の上、博物館としてリニューアルオープンすることとなった。

じつは、平成一八年に御所浦町が合併により天草市となったことで、リニューアル計画が一度白紙になったこと

もあった。それにも関わらず、開館までに至ったのは地元住民などからの後押しの声も大きかった。一例を挙げれば、旧御所浦町「全島博物館構想」の一環として地域の方々などから募った基金が、恐竜骨格標本購入費の一部に充てられた。廣瀬氏によると、皆が自然史に興味があるわけではないが、島から化石が出ることによって、「御所浦が注目され盛り上がる、活性化につながる」という期待から博物館を応援している方も多いという。

実際に地元住民の博物館への参画は多岐に渡る。例えば、展示されている化石には寄贈者名がラベルに記されたものが散見されるが、これらの多くは、後述する島内での化石発掘体験の参加者から寄贈を受けたものだ。これまでの寄贈点数は二千点にも及び、資料館時代は保管場所が限られ、廃校の校舎や倉庫に収蔵していたが、リニューアルにより館内に可動式の棚を備えた収蔵庫が整備され、余裕をもった化石の収集・保管が可能となった。また、発掘された化石は、余計な岩石を除去するクリーニング作業を要するが、この作業は会計年度任用職員として採用された地域住民が担っている。

天草で発掘された化石について解説する廣瀬浩司学芸員。

博物館が教育面で果たす役割も大きく、以前から天草市立御所浦小学校の五、六年生を対象に、島南東の採石場「白亜紀の壁」で化石の採集を行なう「化石セミナー」を開催してきた。実習を交えながら、地域についての理解を深める内容となっており、開館初日、市立御所浦中学校の二年生が外国からの来館者に対して、英語で展示解説を行なっていたが、これはセミナーで学んだ知識が基になっているという。今年度からは、理科の授業で地層や岩石について学ぶタイミングに合わせ、天草市内のすべての小学校の六年生が来島し、博物館を見学する予定だ。

廣瀬氏は、「研究、そして社会教育に力を入れ、天草から出てくる化石の価値を広く皆さんに知ってもらうよう尽力したい。見てみたい人が来島することで観光にもつながると思います。将来は館内のバックヤードツアーも検討しています」と、今後の抱負を語った。

「化石の島」ならではの発掘体験

恐竜の島博物館から、歩いて五分ほどの場所に「『トリゴニア砂岩』化石採集場」があり、「白亜紀の壁」採石場から運ばれた無数の石の中から化石を探す「化石ディグ」体験を楽しむことができる。博物館開館に合わせ、令和六

年三月から採集場の運営を担うのが「株式会社白亜紀」だ。「化石発見率一〇〇パーセント」を謳い文句に、ハンマー、手袋など必要な道具を貸し出し、化石の見つけ方を教えている。

実際に化石探しを体験してみると、存外難しい。化石が入っていそうな石の見当を付けることが肝要で、いたずらに石を割っても化石は出てこない。また、割った断面にそれらしいモノが見えたとしても、化石なのか、ましてその種類は素人には判断がつかないので、常駐のスタッフの案内は心強いだろう。「ずっと化石採集に憧れていたんです」と、語る女性は二人の娘を伴って参加。見事に化石を採集し、その場で一番の喜びをみせていた。

体験参加者に化石の説明をする鍬崎智広氏。

採集した化石は、五個まで持ち帰ることができる。ただし、脊椎動物の骨など貴重なものの場合は、博物館の標本とするため持ち帰れない。そこで「白亜紀」では新たな試みとして、見つけたものと同じ種類の「化石カード」を、終了後に参加者に配布している。「これまでは博物館で受け付けはするものの、現場にはスタッフがおらず、採集のガイドはもちろん、安全面などで課題があった。博物館の負担を減らしながら、来島した人が化石をより楽しめるよう工夫していきたい」と「白亜紀」代表の鍬崎智広氏は話す。

盛り上がりをみせる島づくり

博物館を地域の活性化につなげようと――。馬場昭治天草市長の呼びかけに応える形で、令和四年六月に立ち上がった団体が「御所浦せんばいなか」だ。現在のメンバーは御所浦地域の若手住人三六名。業種は限定せず、先述の廣瀬氏、鍬崎氏も所属している。「これまで島おこしをしてきたメンバーに限らず、新しい人にも参加してほしいと、島に住む一八歳～六〇歳全員に声を掛けた。地域全体で経験を蓄積することが目的」と、発起の趣旨を語るのは、代表を務める山下幹生氏。

「せんばいなか」では、博物館を訪れた観光客が島内を周遊するルートを提案するなど、既存の御所浦まちづくり協議会などの組織と連携しながら、住民の声を天草市などに届ける役割を担っている。このほか御所浦小・中学校の全児童生徒が絵付けを行なった「恐竜の卵」のウォールアートを博物館正面の倉庫に設置するなど、地域住民ならではのフットワークが強みである。

山下氏は「せんばいなかとは、御所浦の方言で〝やるしかないでしょ〟の意。名前通り、この立ち位置でできることに取り組んでいく」と、今後の活動について口にした。

じつは先述の鍬崎智広氏は、「せんばいなか」の事務局長も務めている。出身は熊本県本土だが、勇志国際高校（後述）の卒業生で、デザイン専門学校を経て、建築家としても働いている。御所浦地域には令和三年に地域おこし協力隊として移住し、その翌年には一般社団法人アコウプロジェクトを設立した。同じく地域おこし協力隊として活動する池田皐氏らとともに、島内の空き家の利活用に取り組んでおり、御所浦地域の移住情報を提供するウェブサイト「ごしょんならいふ」の運営や、島外の企業や団体が島で活動をする際の窓口的な役割を担うなど、中間支援組織として存在感を発揮している。「もっと多くの人に御所浦の魅力を伝えていきたい、今後地域の関係人口が増えたらと思うとワクワクする」と、鍬崎氏は意欲をみせる。

御所浦せんばいなか代表の山下幹生氏。

水産業の活性化に向けて

「今の時季はごち網（中層で網を曳く漁法）でタチウオやマダイ、カゴ漁ではタコがメインで獲れる」と、語るのは天草漁業協同組合御所浦支所の杉原範将氏。御所浦島は水産業が盛んで、特に静穏な環境を活かしたマダイ、トラフグ、シマアジ、ブリなどの養殖は全国的にも高いシェアを誇っているが、令和四、五年と続けて赤潮により大打撃を受けた。「赤潮被害をもたらしたのは『カレニアミキモトイ』という植物プランクトン。これまで魚への大きな被害はなかったから大丈夫だと思っていたが、一面海が真っ赤に染まり、生け簀の魚が全滅。数十億円の被害が出た。魚が生き残っても、病気になりやすく、すぐに死んでしまう。天然魚や海底にいるアワビなどへの影響も考えられる。ここまで大規模に発生するのは、環境が変わってしまったとしか思えない」と、杉原氏は悔しさをにじませる。天草漁協では、熊本県や天草市の補助を受けながら「生け簀を深く沈める」「赤潮抑制の散布材を蒔く」「海底清掃」などの対策を行なっているが、なかなか被害防止にはつながっていないという。

一方、明るい話題もある。同五年から六年にかけて島出身の若者五人が高校卒業後、家業を継ぐ形でごち網、カゴ漁の漁師になったのだ。「元々が漁師町なので、親の背中を見てきたからで

はないか。今は市の新規漁業就業者向けの補助制度もあるのでありがたい」

また、近年は「守る漁業」として、島の漁業者の有志が、小魚やエビの生育場となるアマモ場の再生に取り組んでいる。アマモの種を育てて浅瀬に植える作業を、御所浦小の児童も交えながら行なっており、令和四年には「全国豊かな海づくり大会漁場・環境保全部門」で農林水産大臣賞を受賞した。

杉原氏は「博物館に来た人も島の美味しい魚を食べていってほしい。今後、地元の魚を活用した食事を提供する食堂をオープンできたら」と、展望を語った。

島の玄関口の商業施設

御所浦港に隣接する「御所浦物産館しおさい館」は、アオサなどの水産物やかんきつ類など島の特産品を販売している。色と味が異なるスポンジケーキを重ねることで御所浦の地層をあしらった「御地層スイーツ」や、島で採れた魚のすり身を揚げて蒸しパンで挟んだ「すり身バーガー」など、他ではみられない商品も多く取り扱うのが強みだ。このほか定期船の乗船券販売窓口や観光案内所としての役割も果たしている。天草市から指定管理を受けて「しおさい館」を運営する「御所浦未来島株式会社」代表の橋本美和氏は、博物館開館当日のにぎわいについて「今までで一番人が集まった。ゴールデンウィークや夏休みもにぎわってほしい」と期待を寄せる。同社は博物館内にオープンしたミュージアムショップの運営も担っている。

牧島

島だからこそできる教育

勇志国際高校は、牧島に所在する広域通信制高校である。平成一六年に開校し、令和七年には開校二〇周年を迎える。「今も昔も、背景に不登校などの悩みを抱え生徒たちが多く入学してくる。そんな子どもたちに対して、自然豊かな環境や人との交流など、島だからこそ与えられる環境がある」と、櫻庭輝典教頭は同校が島に所在する理由を語った。

通信制であるため、生徒たちは自宅など各々の場所で、録画授業を視聴し、レポートを提出、添削を受けながら学習を進める。彼らが牧島を訪れるのは、年に一度のスクーリング。四泊五日の日程で島に滞在する。対面での授業、定期試験に加え、特別活動として無人島へ行ったり、魚釣りや伝馬舟なども体験する。来たときには元気がない生徒も、帰るまでには友人ができ、次年度のスクーリングも一緒に参加することもあるそうだ。

開校当初一一四名だった生徒数は、現在二一五八名に達する。「コロナ禍を経て、通学しないでも学ぶことができ

る通信制高校への理解が進んだ。ICT技術の進歩もプラスに働いている。学校をとりまく環境は変わっても、島の魅力を体感させることで、生徒たちの成長につなげる想いは変わらない」と、櫻庭教頭は話す。

勇志国際高校の櫻庭輝典教頭。

櫓漕ぎ体験と知恵の継承

勇志国際高校からほど近い、牧島南西部の長浦。静穏なこの入江では伝馬舟の櫓漕ぎを体験することができる。体験を運営するのは、三宅啓雅氏ら住民一〇名で構成される「伝馬舟愛好会」だ。三宅氏は修学旅行生の受け入れなど、島の体験型観光の振興に長年寄与し、現在も「御所浦アイランドツーリズム推進協議会」の事務局長を務めている（詳細はしま二七六号特集参照）。「（櫓漕ぎは）大人より子どものほうが習得が早く、一五分で漕げるようになる。ただ、過去に経験したことがあると、体が覚えている。七十歳代の方がもう一度櫓漕ぎをしたいと、来島したこともあった」と、三宅氏は説明する。

三宅氏は、先述の池田氏をはじめとした島の若手たちに対し、伝馬舟の漕ぎ方や、島の自然や歴史について教えている。「せんばいなか」に対しては「色々な人が集まって島を何とかしようとしているのが非常に心強い。何か手伝えることがあれば協力は惜しまない」と、期待を寄せる。博物館開館当日は、化石採集体験場の応援に駆け付け、長年培ったスキルで参加者に化石の探し方や種類を教えていた。

来島者が滞在しやすい島へ

牧島に令和五年にオープンしたのが「島カフェここね」だ。島内唯一のカフェとして、自宅を改装した店内で焼いたパンやケーキ、ドリンクなどを提供している。予約制でカレーやピザなどを出すランチ営業も行なっている。店主の森枝正恵さんは「カフェを開業する前は島で保育士をしていた。定年後、母をはじめ近所の高齢者が集まれる場所があったらと思い、店を始めた。現在、店では月に二回ほど皆に脳トレパ

島カフェここねの「恐竜クッキー」。

ズルなどを行なってもらう『認知症予防カフェ』も開いている」と語る。

博物館の開館に合わせ、従来は廃棄されていた島の養殖マダイの骨を粉末にし、混ぜ込んだ「恐竜クッキー」を新たに販売。店内および「しおさい館」で購入することができる。森枝さんは「昔から住んでいる自分たちでも知らない島の魅力をたくさん発見し、体験してほしい」と、笑顔を見せた。

池島 均氏。民宿まきしまにて。体験メニューを記した看板には「TENMA(伝馬舟)」の文字が。

島内周遊の促進を

「島カフェここね」に隣接するのが「民宿まきしま」である。主人の池島均(ひとし)さんは島出身で、大阪で運送業に従事していたが、二年前にUターンして実家の民宿を継業した。「都会より時間がゆっくり流れている。お客さんにも同じようにリラックスしてほしい」と、島の良さを語る。全三室で、島の新鮮な魚料理が評判。宿泊以外にもSUPや船釣りなどの体験も提供している。

御所浦地域の観光振興の課題として、池島さんは「島内交通」と「カーフェリー」を挙げる。現在の島内交通は、バスのほかにレンタカーが軽自動車三台、小型電気自動車二台と少なく、観光客は棚底港・大道港からフェリーで自家用車とともに来島することも多い。棚底便は一日四往復あるが、大道港は一往復しかないため、後者のルートでは日帰りが難しい。「島内を移動する車がないと、徒歩で回れる御所浦港・博物館周辺で観光が完結してしまう。レンタカー・レンタサイクルの充実は必要。また、フェリーの便数を増やすとともに、事前予約制度などもあると便利」と述べた。

天草市は博物館開館を御所浦地域の観光振興につなげるべく、オープンに合わせてアプリ「御所浦 恐竜の島 探検地図〜しまたん〜」をリリース。このアプリでは島内の名所や恐竜オブジェ、お手洗いなどの情報を地図上で確認できるほか、島の各港を起点としたおすすめの周遊コースも紹介している。

また、市は「休憩場所設置補助金」を創設。「ここね」や「まきしま」をはじめ、島内の住宅の庭先を、来島者が休憩できる「おうちカフェ」として提供する住民に対し、イスやテーブルの設置費を補助している。

横浦島

住民と来島者の交流イベント

横浦島西部に位置する天草市立御所浦北中学校は平成二四年に御所浦中学校へ統合される形で閉校となった。その跡地を活用して、令和四年から始まった取り組みが「よこうらじまキャンプ」だ。横浦島の住民で構成される「御所浦北地区振興会」と、先述の鍬崎智広氏らが企画・運営しており、島外の人を島に招いて、校庭にて一泊二日でキャンプを行なう。参加者は、昼に来島してテントを設営、夜は地域の方々と島の海の幸を材料にＢＢＱ、住民コンサートや焚火をすることで交流を深める内容である。使用するテントは防災用に準備されたもので、住民の避難訓練も兼ねているという。運営に関わるアコウプロジェクトの池田 皐氏は、「御所浦地域では昔から『しゃーもらい（おかずもっていきな）』というもてなしの精神を示す言葉がある。その言葉通り、住民の皆さんは参加者に親切」と、交流イベントの魅力を語った。年二回開催されるイベントは、島での非日常感や心温まる住民との交流を気に入ってリピーターが多いとのことだ。

先述の「せんばいなか」の山下幹生氏は横浦島在住で、普段は海上タクシー「大鵬丸」を営んでいる。実家は「山下商店」として横浦島で食料や日用品を販売。令和四年からは、島内事業者を継業する形で、島で唯一の灯油やガソリンなどの燃料販売も担っている。

■

以上、開館した恐竜の島博物館を中心に、御所浦地域三島の現況や取り組みを概観してきた。御所浦の住民は、たとえ化石に関心が薄くとも、博物館を機に島が盛り上がればと、期待を寄せ、活動を応援・参画することで、地域全体に活気が生まれてきている。この好循環が継続・加速していくことを期待したい。

全国で島内に博物館を有する島は多い。博物館の重要な役割は〝地域の魅力を伝えていくこと〟である。地元の方々はもちろん、他地域に住む一般の皆様、地域の未来を担う若者や子どもたちなど、時空間を越えて島の価値を伝えていく意味で、御所浦は好事例になるのではないだろうか。

（文・石川／写真・小原佐和子）

大盛況で終えた令和6年5月の「よこうらじまキャンプ」（天草市御所浦支所提供）。